

江戸時代以前の越谷を通る奥州道

加藤幸一

越谷を通る日光街道（日光道中）は、江戸幕府によってできた江戸初期の直線道路である。その時に草加宿や越ヶ谷宿、粕壁宿が成立している。しかし、その前から奥州（東北地方）へ通じる古くからの道があったはずである。

その越谷や春日部を通る古い道筋が、江戸時代中頃（文化文政年間）に越ヶ谷宿の本陣を勤めた福井猷貞（ゆうてい）によって書かれた「越ヶ谷瓜の蔓」の中に記述されている。その道筋を前提に、古道は主要な川の自然堤防上を通ったことと、越谷・春日部周辺の江戸時代の古地図（越谷市立図書館所蔵）の解説をもとに、古い奥州道のルートを推察することにした。

一・「越ヶ谷瓜の蔓」に書かれた奥州道

江戸時代以前の「往古奥州道」について次のように述べられている。「く通り」は「く」を「通り」と置き換えるなど、原文一部手直しした。

- ① 千代田御城下より、② 千住秋屋の里、③ 大原通、④ 八条堤通、⑤ 南百角より西方、⑥ 中町横町より元荒川を「渡り」、⑦ 押立堤を「通り」、⑧ 大里古往還、⑨ 間久里、⑩ 粕壁橋手前より、⑪ 百間を「通り」、幸手に「入」。
- ⑫ 御成道迄川付き堤を「通り」、往還にて之れ有る由。

二・江戸時代以前の奥州道のルート

前述の①～⑫の項目を以下、次のように考察した。

① 徳川家康は、天正十八年（一五九〇）に関東入りし、江戸湊（えどみなと・東京湾）から奥に入り込む遠浅の日比谷入江（新橋から大手町にかけて）そばの江戸館（えどやかた・後の江戸城、千代田城）に移り住んだという。奥州への道

筋は、まずはここから平川（ひらかわ・日本橋川）を渡り（今の常磐橋あたり）、その後は、後の日光街道筋を進み、忍岡（しのぶがおか）や浅草寺（せんそうじ）の東側を通り過ぎ、隅田の渡しを渡り、隅田川の対岸の木母寺（もくぼじ）あたりに至る（地図1）。そして東進して古代の隅田宿（墨田二丁目交差点）に進み、ここから関屋の里に向けて北西に進む（地図2の下部）。

② 「千住秋屋の里」とは「関屋の里」の誤りであろう。この里は、現在の千住関屋町あたりから隅田の渡しのある木母寺までを指す。

関屋の里から江戸時代の日光街道筋さらに下妻街道筋を通る道があるが、これが越谷・春日部地域を通っている奥州道と考えられる（地図2の中央）。

③ 「大原（だいら）通り」とは、八潮市内にある大原道（だいらみち）を指す。大原を抜けることから、千住から下妻街道沿いに行き、現在の内匠橋（たくみばし、江戸時代の榎戸橋・えのきどばし）を渡る。その先は左折して、大原に向けて北上する道、大原道を通る（地図2の上部）。

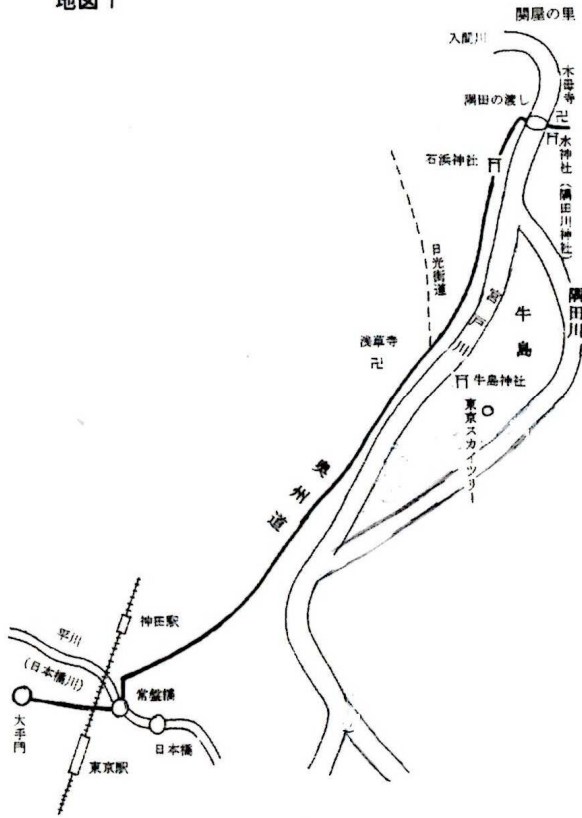
なお、内匠橋から小菅方面に流れる現・綾瀬川は江戸初期の寛永年間に作られた人工の川である。

一方、内匠橋より、そのまま、まっすぐ東方に進むのが下妻道である。実は、この下妻道の方が奥州道であるとの説がある。その説によると、古新田（こしんでん）の古利根川沿いに進み、八条の渡しに向かうことになる。古新田村の古利根川沿いに、今でも大相模地区に見られる土手道のような堤土手の道が残っている。これも奥州道の一つではあろう。

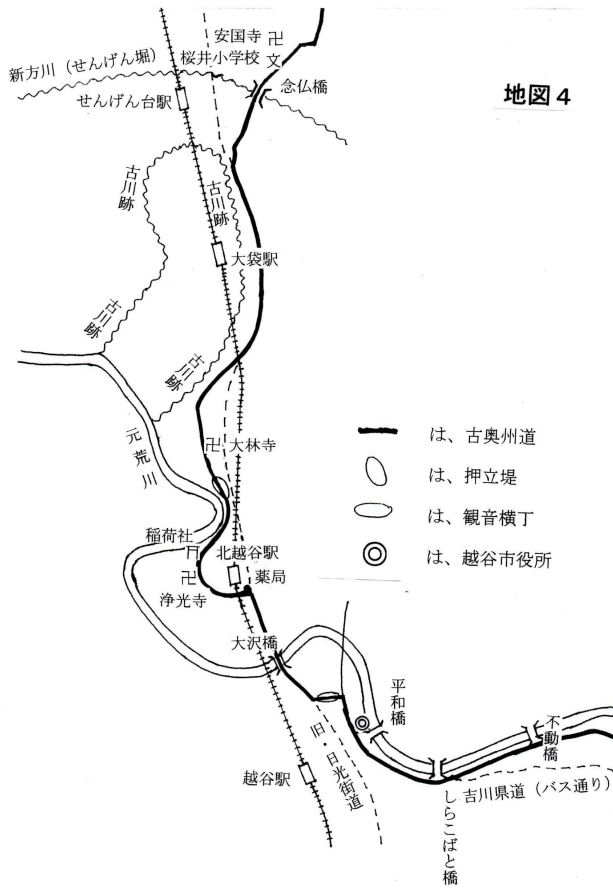
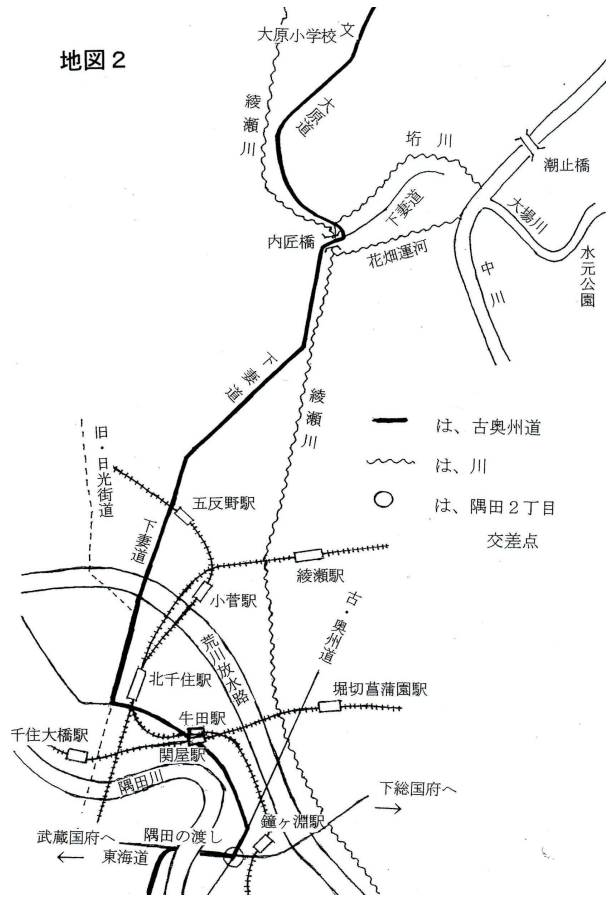
しかし、大原道も比較的高い土地（かつての大河と推定される毛長川の自然堤防か）にあり、「八条の渡し」に行くには大原道の方が大水で難渋することもあまりないだろうし、最短距離であるので、奥州への街道筋としてはふさわしい。

④ 「八条堤通り」とは中川右岸沿いの堤の土手道を指す（地図3）。大原道の突き当たりの八条の渡しで川を渡らずに、川の右岸に沿って北上する。これが「八条堤通り」と呼ばれていたであろう。八条堤とは八条領にある中川沿いの八条、柿ノ木町、東町（あづまちょう）にある自然堤防上の堤の土手道のことである。現在の土手道は、過去に何度も決壊したため大きく変わっていると思われる。地元では下妻道と呼ばれ、この下妻道沿いには八条遺跡や八条輪中遺跡という古代

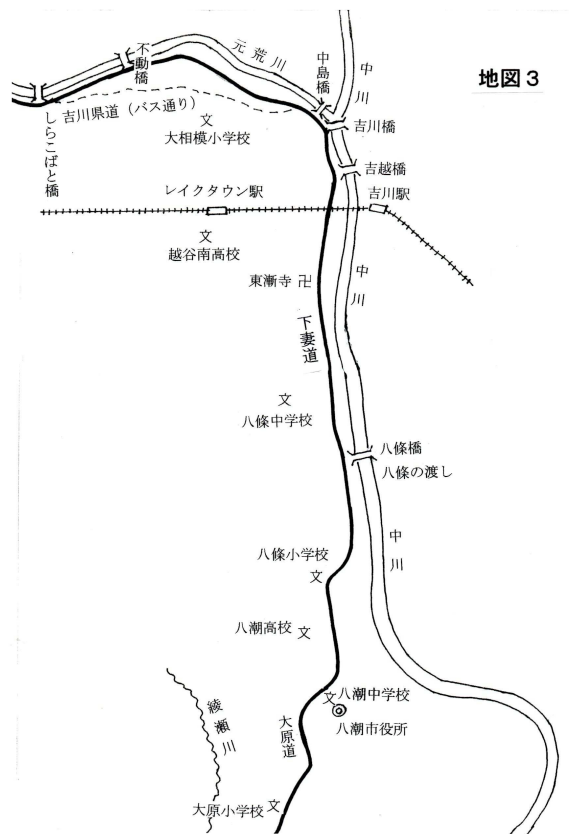
地図 1



地図 2



地図 4



地図 3

から中世にかけての埋蔵文化財包蔵地がみられる。

⑤ 「南百角より西方」とは、南百（なんど・吉川橋そば）で左方面に曲がって進む、南百から西方（大聖寺だいしようじ方面）にかけての元荒川の土手道を指す。今でもほぼ昔のままに留めている土手道が一部残っている（写真1）。中川（古利根川）沿いの八条堤通りより、引続き元荒川沿いの右岸の土手道を西に進むのである（地図3の上部）。

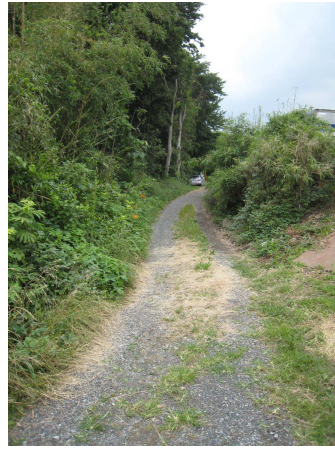


写真1

大成町の「あやの幼稚園」の北西にある砂利道で、大成町1丁目117番地と51番地の間の古道。

古代の元荒川は、下総国と武蔵国との国境を流れた利根川本流であり、その後は荒川の本流ともなった大河である。

この大相模の土手道沿いの地域で発掘すれば、八条地域と同様に古代から中世にかけての遺跡が発見できるに違いない。

その後は、瓦曾根溜井沿いの土手道、越谷市中央市民会館や市役所の西側の道（かつての土手道）を通過して観音横丁の入口にたどり着く（地図4の下部）。

⑥ 「中町横町」とは、日光街道（日光道中）に架かっていた中町橋を中心の中町橋の北の日光街道沿いと東の現在の観音横丁を含む地域のことではないであろうか。

観音横町から現在の日光街道へと進み、大沢橋南詰の市神様（いちがみさま・神明社、現在は同じ日光街道沿いの南方に移転）があったあたりで元荒川を船で渡ったと思われる（地図4の下部）。

元荒川を渡ってからの先は、現在の日光街道のように北へ直進すると、大沢で最も低い天神前橋辺りを通過して湿地帯を通ることになってしまうので、浄光寺東側を通過して大房村の鎮守である稲荷神社（迅速測図では猿田彦祠）の東側に通

じる大房道と呼ばれる古道が往古奥州道と推定できる。現在は開発により³その道は全く無いが、北越谷駅前郵便局そばの十字路や北越谷公民館付近を通過している。その古道沿いの浄光寺本堂裏の墓地造成地からは昭和五十年に中世の古銭が出土したという。かつての古い道であったことがうなずける（地図4）。

⑦ 「押立堤（おったてつみ）」とは、北越谷第五公園そばに

今もある土手道ではないかと考えた。

（写真2）。

「押立堤」は、「押江

（おおえ）りの薬師

（大房の薬師堂）と

関連していると思わ

れる。「押江りの薬師」

は、現在は宝性院と

呼ばれる別の寺院が建っている。北越谷第五公園そばに今も残る土手道は、秦野秀明氏によると、すぐそばに村組の「押立組」がかつてあったので、これが「押立堤」と呼ばれたと断定している。

押立堤のそばの現在の北越谷第五公園は、かつての元荒川の入り江であり、元荒川を利用して船のための停泊地であったと思われる。江戸湾の満ち潮がこの入り江まで遡上し、「押江りの薬師」は、「鵜の森の薬師」とも呼ばれるように、その周辺の森には鵜が多く住んでいたであろう。

なお「押立」の読み方は、本来の読み方の「おしたて」が「おったて」となまったものであろう。

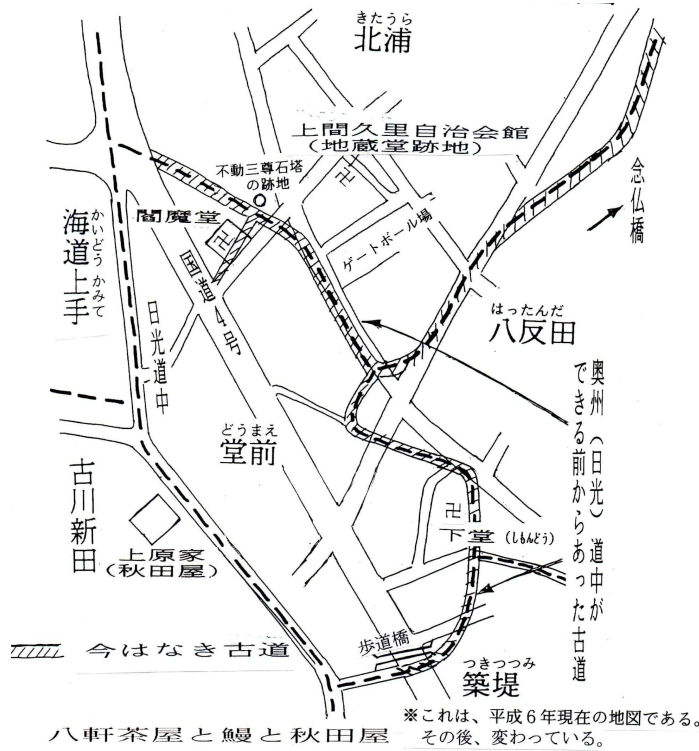
⑧ 大里の「古往還」とは江戸時代の日光街道（日光道中）より古くからあった街道を意味し、大林（おおばやし）や大里（おおさと）あたりでは、日光街道より西側の元荒川の古川沿いの自然堤防（河畔砂丘）上を日光街道と並行して進んだと思われる。大林の香取神社西側あたりから古川までの自然堤防上の河畔砂丘



写真2

押立堤（おったてつみ）

図1 平成6年当時の旧・上間久里の古道



には「大林の桃山」が一面に広がっていた。ここに大林寺(だいらんじ) 西側を通る奥州道があったと思われる。つまり、大林寺の西側や現在の大林自治会館の前の道を通り、日光街道(日光道中)と東武鉄道とが交差する大里の踏切あたりで日光街道に合流したのではないだろうか(地図4)。

⑨「間久里」(まくり)とは、現在の下(しも) 間久里・上(かみ) 間久里を指し、その古道は、元荒川の古川沿いの自然堤防上にある現在も変わらぬ日光街道(日光道中) 筋と思われる。間久里から先の粕壁橋までに至るルートについては「越ヶ谷瓜の蔓」には全く触れていない。

間久里の先は、現在の新方川(にいがたがわ・せんげん堀) 手前の湿地帯である北浦の地となり、現在の日光街道のように直進して大枝村を通過するとは考えにくい。この湿地帯を避けるため、北東の大泊(おおどまり) 村方面に迂回したと思われる(地図4の上部)。

図1の中の秋田屋は、高崎力(つとむ)氏によると秋田藩の佐竹公が大名行列の途中で必ず立ち寄って鰻を食した所。この時、日光街道(日光道中)は閉鎖され、旅人は東側の古道を通ったと伝えられるという。古道は、いわば日光街道の臨時のバイパスとなったのである。この古道が、かつての奥州道と推定される。この道から念仏橋方面に進んで、江戸時代は細流だった「せんげん堀」を渡り、道なりに行くと、安国寺の参道に突き当たる。高崎力氏によると、その先は道がなく、そこで右折し、さらに左に曲がって進み、現在の主要な道路に出るといふ。その道を横断して平方村方面に通じる道を通して北進する(図2)。

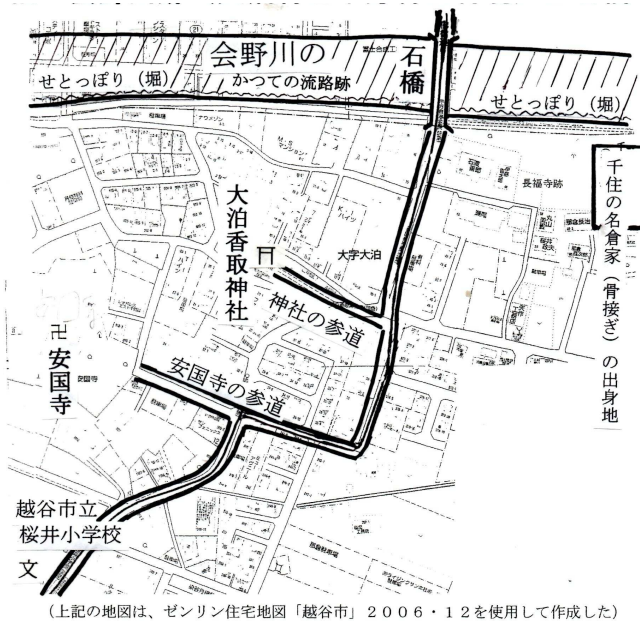


図2 会野川の横断

大泊村と平方村の村境には、かつて会野川が東西に流れていた所であり、高崎力氏によると、長い石橋がその川に架かっていて、戦前まで見られていたという。今でも屋号が「石橋」と呼ばれる家が北浦側にある。この会野川の名残の「瀬戸堀」を渡って進むと現在の「野田岩槻線」の会野川沿いの土手道に突き当たる。今度はこの土手道を西に進み、再び会野川(現在は会之堀川)に架かる上流の会之堀橋を渡って現在の日光街道(日光道中)に合流するのである(地図5)。

春日部市に入ってからからの古奥州道は、現在の藤塚橋の北から備後村の周りを西に反時計回りにかけて流れて「会野川」（平方村の南側の周りを流れる当時の川で、今はその名残はない）に合流した川（現在の会之堀川の一部）があり、この川を仮に「備後西川」と名付けると、備後西川の左岸の備後村にあるよく発達した自然堤防（河畔砂丘）上の道を進んだと推定した。

つまり、会之堀橋（旧称・土橋、俗称「我慢橋」）から日光街道（日光道中）を北に進み、備後南交差点で東側方面に左折した道に入る。地元では「高道（たかみち）」と呼ばれ、武里小学校の東側の道に通じ、かつては高く盛り上がった古道で、備後の西側にかつては流れていた備後西川の土手道といえる。

次は、この備後西川を渡り、円福寺の西側、そして地元ではかつて「街道」と呼ばれた大池通りを進み、「粕壁橋」方面に向かったと思われる（地図5）。



地図 5

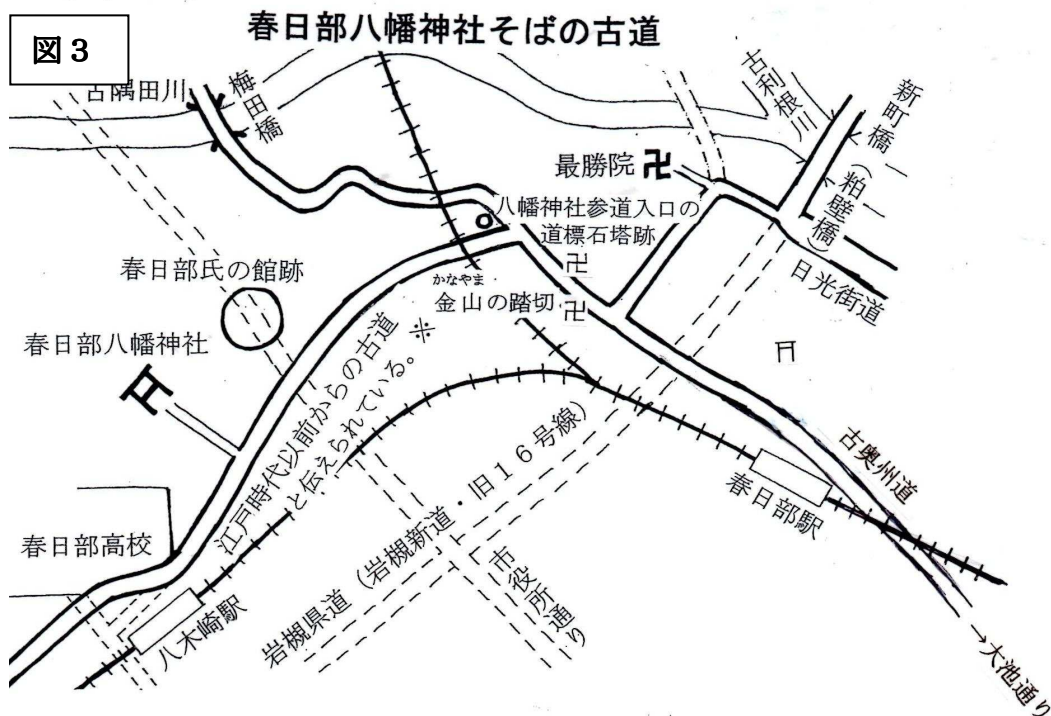


図 3

上記の春日部八幡神社前の古道は、現在の国道16号の新方袋（にいがたぶくろ）交差点、さらに豊春中学校そばの古隅田川にかけて架かっていた矢島橋や埼葛（さいかつ）斎場そばを通過して、御成（おなり）街道につながる大切な道であったと推定できる。

⑩ 粕壁橋とは下の古絵図（図3）

の解説により、現在の古利根川に架かる「新町橋」であるとかかる。粕壁橋そばの古利根川を渡らずに、粕壁橋手前を過ぎて、西にある自然堤防と河畔砂丘が発達している浜川戸付近の古隅田川を渡ったものと推定する。その場所は梅田橋あたりではないだろうか。梅田橋は、古く江戸時代から古隅田川に架けられていた橋であるからである。

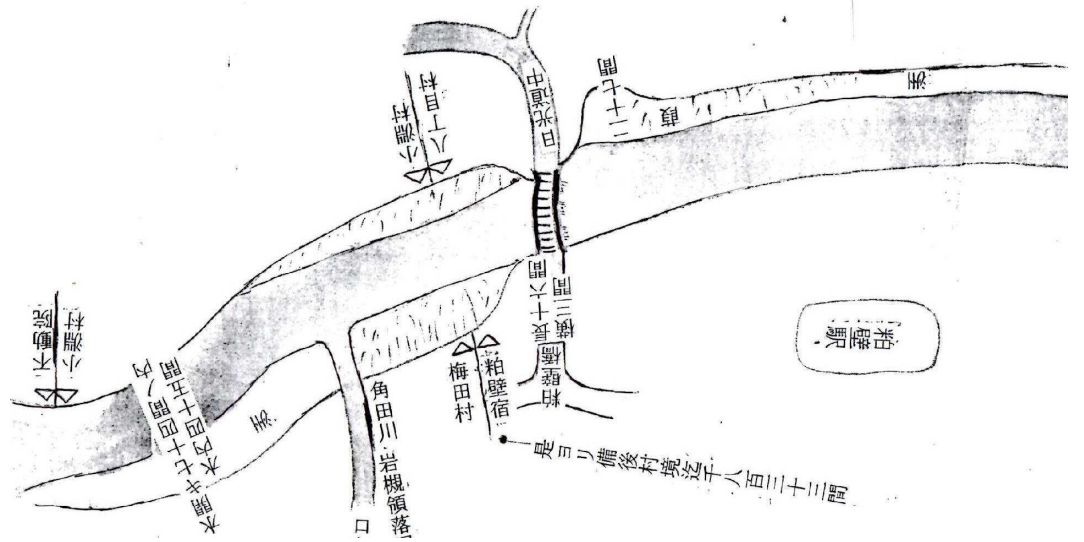


図3 粕壁橋

越谷市立図書館所蔵
「絵図の部」資料番号
25、「八条領村々絵
図」（解説・加藤）

⑪ 「百間」を通り、幸手「に」入るとは、古隅田川を渡ってからは、現・宮代町の百間を通り、当時の利根川（現、古利根川）にあった高野（たかの、現・杉戸町）の渡しを渡り、かつての鎌倉街道であった日光御成道（鎌倉街道の中ッ道・中の道）まで進み、そこから御成道、さらに御成道に合流する日光街道（日光道中）へと進み、江戸時代の幸手宿に至ったのではないであろうか。



写真3 日光街道と筑波道との追分（幸手市外国府間）

向かって左の道が日光街道、日光街道から分かれる右の道は筑波道。中央の石塔は、「右つくば道、左日光道」と刻まれた道しるべである。

⑫ 「御成道迄川付き堤（を）通り、往還にてこれある由。」とは、百間から

日光御成道までは川付き堤を通り、御成道に合流してからはかつての鎌倉街道であった街道筋（日光御成道や日光道中）へと進むということであろう。「川付き堤」とは、かつての利根川本流である高野川（たかのがわ・現・古利根川）左岸沿いの堤上の道と推定できる。また高野の渡しは、下高野（しもたかの）にある「万願寺橋」あたりとされている。

さらにその先にある日光街道から筑波道に分かれる追分（幸手市外国府間六二六、写真3）で、筑波方面に進み、現在の権現堂川にかけてあった「栗橋の渡し」（元栗橋、現・五霞町）を渡って奥州へと進んだのであろう。